

ESD（持続可能な開発のための教育）としての食品産地ワークショップ —新聞折り込み広告を用いた学習材の開発と活用—

河本大地

KOHMOTO Daichi

私たちの日常の食事や日本の農業は、グローバルな食料供給システムに取り込まれている。このことについて実感をもって理解するには、私たちの口に日常的に入る食材がどこからやってきているのかを知るのが一番である。食料の流れを知り、消費者としての自らの行動をベースに世界の現状とその背景、今後のあり方を考えることは、ESD（持続可能な開発のための教育、あるいは持続発展教育）の取り組みとして位置づけることができる。本稿では、筆者が授業等で実践しながら開発・活用してきた、身近な新聞折り込み広告を用いて食品の産地の分布を知る参加型ワークショップについて、内容と構成を紹介する。

キーワード：食育、ワークショップ、食品、地理教育、ESD

1. はじめに

私たち日本に暮らす者の日々の食の多くは、世界各地・日本各地の食材に依存している。特に都市部では、食料の自家生産や物々交換に乏しいため、食材の生産者と消費者の意識が乖離していたり、若者の食の質が悪化していたりといった状況が多々見られる。また、日本の農業もグローバルな食糧供給システムに取り込まれている。

そこで、身近な地域の食が世界および日本のどの地域からやって来ているのかをわかりやすく可視化し、食のあり方について考察すべく、教材開発をおこなった。本稿では、筆者が授業等で実践しながら開発・活用してきた、新聞折り込み広告を用いて食品の産地の分布を知る参加型ワークショップについて、その内容と構成を紹介する。

なお、本稿で扱うワークショップは、広島大学総合科学部「地域文化研究特論B」（2008年）、神戸夙川学院大学観光文化学部「調査研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」（2009～2013年）、関西学院大学文学部「地理学地域文化学特殊講義3」（2009～10年）で実施した。

2. 実施条件

新聞折り込み広告のうち、スーパーマーケット等の食品部分をあらかじめ入手しておく。実施会場に近い図書館等で、複数のスーパーマーケット等の広告を得ておくと、参加者は身近さを感じやすい。入手する広告の量は参加者数や実施時間によるが、少し余分に準備しておき、新しいものから順に使用するとよい。

会場には、黒板あるいはホワイトボードのある、少し広めの部屋が適している。大きめの机があれば、地図に付箋を貼るなどの共同作業がおこないやすくなる。

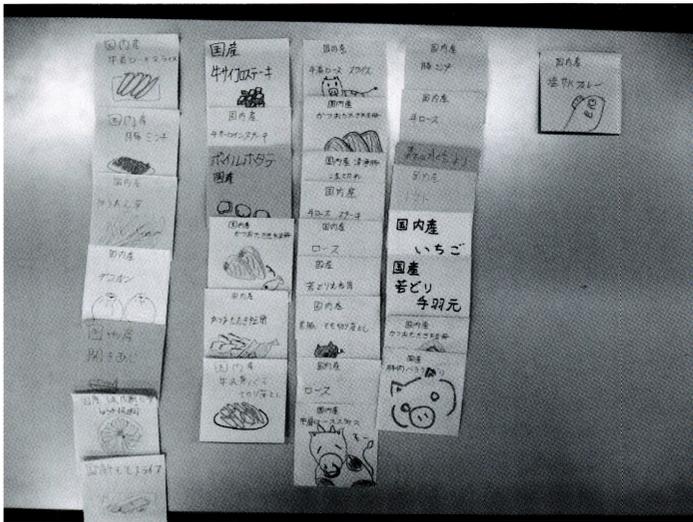
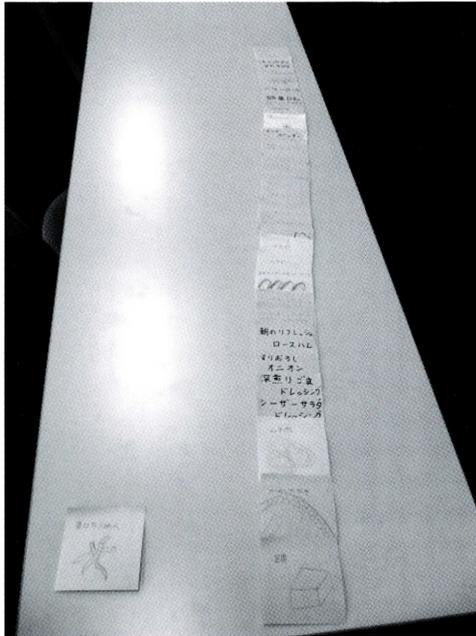
時間は、次章の構成に示す「振り返り・共有」を含めるならば180分程度あったほうがよい。含まない場合には90分間程度で実施可能である。

3. 構成と学習内容

以下ではこのワークショップについて、時系列で、学習活動・内容、ねらい、準備物を記す。全体は、導入、展開1、展開2、振り返り・共有の4セッションに分かれている。

	学習活動・内容	ねらい	準備物
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜこのワークショップを行うのか説明。 ・本地域における食料品店(スーパー等)とその広告を確認。 ・広告をどのように入手したかを説明。 ・作業手順の説明。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワーク内容と自分とのつながりを理解し、モチベーションを上げる。 ・地域住民の食料購買行動の概要を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・食料品店の広告(新しい順に置いておく) ・付箋(4色)
展開1	<p>・「切り切り班」、「書き描き班」、「貼り貼り班」の3つに暫定的に分ける。ただし、その時々各班の仕事量に応じて適宜役割を入れ替えてもよい。</p> <p>・切り切り班は、広告から食料品部分のみ1品1品切り取っていく。その際、産地表記のないもの、「国産」あるいは「国内産」と表記されているものは、別に場所を作って並べていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・作業を通じての、和気あいあいとした雰囲気醸成とチームワークの向上。 ・手を動かしながら、食や産地への関心を高める。作業過程で気づきや疑問が生まれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・はさみ、ペン、色鉛筆(クレヨンもあると絵心をそそる場合あり) ・世界地図と日本地図(各A0以上の大きさがよい)





・書き描き班は、切り取られた広告から付箋に商品名と産地表記を転記。絵心のある参加者がいれば、食品の絵を描いてもらってもよい。なお、付箋は4色。肉・魚介類はピンク色、野菜は黄緑色、果物は黄色、その他(加工品・米など)は水色を用いる。



・貼り貼り班は、産地表記のある付箋を、世界地図および日本地図上に貼っていく。世界地図では国ごと、日本地図では都道府県ごとにまとめていくのが基本。その際、付箋が特定の場所に密集してきたら、近くの空いたスペース(海など)に適宜移動させるか、付箋を重ねていく。



・各班とも、作業中の気づきや疑問をメモしていくとよい。

展開2

・両地図の付箋の分布から読み取れることを発問。

・世界および日本における大まかな空間的分布を理解する(これを省くと、「どの国(あるいは県)が多い」など国や県の単位でのみ捉えようとする学



・各国・県等の付箋の枚数を、分担して色別に数える。その際、枚数の多い品目(たとえばサーモン、バナナなど)があれば、あわせて国・県等ごとに数えて記録する。



・黒板を3分割し、左2つに世界の結果、日本の結果をそれぞれ書かせる。その際、国産(および国内産)表記のもの、産地表記のないもの、付箋の色ごとに数えて黒板のどこかに記す。

生が出てくる。マルチスケールでの理解には必須。

・上記の空間的分布を国・県等ごとに数値化し、さらに内訳も一部記すため、より具体的に地域差を実感する。「うわー、北海道めっちゃ多い!」、「韓国パプリカばっかりやん!」、「え、パプリカって何?」といった驚きの声や、さらなる興味を引き出せたら成功。



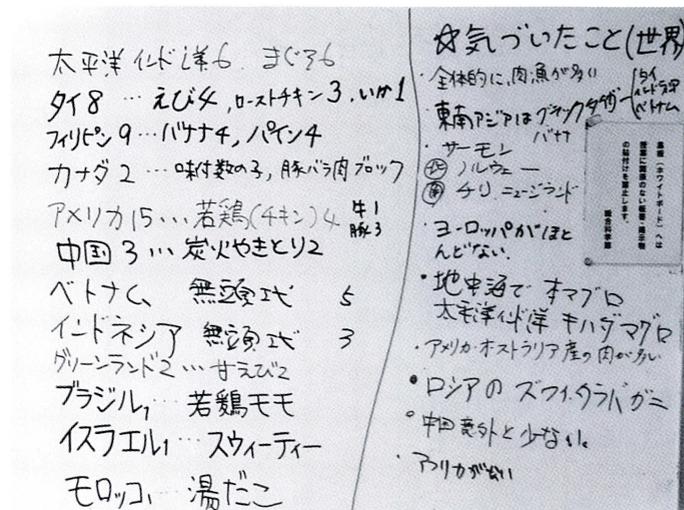
振り
返り・
共有

・各自の気づき(上記データから読み取れること)を、メモ用の紙に考えて書かせる。なぜそのような結果が出たのかも書かせる。時間がなければ、それらを宿題にし、共有を次時にしてもよい。

・データの読解力と、データをもとに考えようとする態度を身につける。

メモ用紙(裏紙
など)

・黒板の右の欄に、各自の気づき(読み取れること)をひとり3つ程度書かせる。



・教員は、出てきた気づきを褒めつつ、適宜補足する。他地域や他の季節の結果と比較してもよい。

・一連のワークで気づいたこと、学んだことを、自分の消費行動と照らし合わせて書かせる。

・自分と産地(他地域)とのつながり、自分の消費時の選択のあり方を考える。

アプローチを要する。

4. ESD 学習材としての意義

本学習材は、ESDとしてはどのように評価できるであろうか。ここでは、2006年に日本政府の「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議が発表した、「わが国における『国連持続可能な開発のための教育の10年』実施計画」で示されている、「ESD実施の指針」を参考にする。これを参考とするのは、2002年に南アフリカ共和国で開かれた「持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルグ・サミット）」において、日本政府が「ESDの10年」を提案し、同年の国連総会で決議されていることによる。「ESD実施の指針」では、7つの項目が挙げられている。

このうち、「(1) 地域づくりへと発展する取組」については、「ESDの取組においては、学習者が多様な課題を実感し、自らの問題として捉え、解決に向け実践することが必要であり、そのためには「教育を受ける個人に近い地域において、地域の特性に応じた実施方法を開発し、発展させることが重要」とされている。本学習材は、「教育を受ける個人に近い地域において」実施する点において、これに合致する。また、「地域の特性に応じた実施方法」は、ワークショップの参加者に応じた柔軟なアレンジを施すことによって可能となる。ただし、「自らの問題として捉え」るには、振り返りを充実させる必要がある。

「(2) 教育の場、実施主体」では、「ESDは、政府や地方公共団体だけが実施するものではなく、個々人の意識に影響を与えるあらゆる場で実施されること」や、「公的機関にとどまらず、地域コミュニティ、NPO、事業者、マスメディアなど、あらゆる主体が実施主体となることが重要である」とされている。本学習材は、「個々人の意識に影響を与えるあらゆる場で実施」可能であり、「あらゆる主体が実施主体となること」ができる。

「(3) 教育の内容」については、「様々な分野をつなげて総合的に扱っていくことが必要」とされている。本学習材では、食材やその産地への関心を惹起することはできであろうが、社会経済の構造や環境問題などに広げていくためには、本学習材を出発点に、さらなる別のア

「(4) 学び方・教え方」に関しては、「単に知識の伝達にとどまらず体験、体感を重視して、探求や実践を重視する参加型アプローチとすること」や、「活動の場で学習者の自発的行動を上手に引き出す『ファシリテート』の働きを重視することも大切」とされている。本学習材は、まさにこれに合致する。

「(5) 育みたい力」では、以下の5つが提示されている。

- ① 問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方を重視した体系的な思考力（systems thinking）
- ② 批判力を重視した代替案の思考力（critical thinking）
- ③ データや情報を分析する能力
- ④ コミュニケーション能力
- ⑤ 持続可能な開発に関する価値観（人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重）

本学習材の場合は、①については、これを育むための「問題や現象」の可視化は可能である。②については、自分の消費行動に対する代替案を考えることにつながる。③については、データや情報を本学習材で得ることになるが、それらを展開2や振り返りの段階でどの程度分析できるかが鍵となる。④は、本学習材では共同作業が多いため育むことが可能である。⑤については、本学習材の意図する範囲を超えているが、たとえば世界の南北構造や日本の農村地域の未来を考えることなどにつながるの可能性がある。

このように、本学習材はESD学習材としての意義を有していると判断できる。特に、地域づくりへの発展につながる事、あらゆる場であらゆる主体が実施できる事、参加型アプローチである事、自らの消費行動を再考できる事、コミュニケーション能力を育めることなどが、ESD学習材として評価することにより見出された。一方で、本学習材で参加者が学んだ内容を社会経済構造や環境問題等の学びや、持続可能な開発に関する価値観の醸成につなげるには、次なるステップが必要である。

ピアスーパーバイザーからのコメント

身近にある「チラシ」を教材にして行うワークショップ形式の授業はとても良いと感じた。ESD 学習材としての意義はわかったが、参加した学生の反応が気になる。また、ファシリテーターとしての先生の役割や苦労した点などもう少し詳しく記されるとさらに内容のあるものになるのではないか。

(担当：観光文化学科 西村 典芳)